

平成25年9月

創業者の思いと後継者の願い

古田土会計を創業して今年で31年目です。事業を継続するためには後継者を選び、駅伝のたすきを次の人に渡すようにバトンタッチをしなければなりません。

創業経営者及び奥様は会社を大きくしようというより、事業を続けるために必死になって働き、土曜日も日曜日もなく、朝早くから夜遅くまで働き詰め、子供の世話もできなく奥様に叱られるながらも感謝しながら会社経営に没頭して、会社も世間様に認められる規模になりました。創業社長にとって会社は自分が生んで育てた子供です。実の子供より可愛いかもしれません。自分の命と同じくらい大事な会社を護るのです。どんなに寂しい思いをしているか後継者はわかりません。後継者は会社又は社長を譲ってくれたのだから黙って口出しはしてほしくないかと思っているかもしれません。しかしこれは間違いです。人生のすべてを賭けた会社を護るのです。譲られた者が、譲った者を無条件で長く立てあげなければ引退の花道を飾れないばかりか、自分が無視されているおで寂しくてしょうがないものです。後継者は先代の気持ちと稟し、報連相を徹底することです。社長は会長に毎日一日あったことを報告し、アドバイスも求める何か新しいことに取り組むときには事前に相談する。人事の問題が起きたら自分で決断できることでも会長に相談して感謝する。とにかくかかりがれ信頼される。後継者は自分に経営能力があると思っても信頼されなければ社長の座は他の人に取って替わられます。譲るのは経営権であって、支配権ではないかです。ほとんどのケースで社長の座は譲っても株式を譲ってはいません。後継者が自分に信頼できないかと思つたら株式による支配権を使って社長を解任することが出来ます。私はそのよき事例をたくさん見てきました。後継者は先代が自分のことをどう見ているのか常に意識しなければなりません。自分しか後継者がいないとたかをくくっていたら息子、娘、娘婿でも会社を追放されます。後継者は先代を立てて大切にします。現在この会社があるのは先代のおかげと社の内外で言い続ける。退職金はできるだけ多く払う。債務超過にないなければよい。株価が低くなるので低額で譲り受けることができる。繰越欠損が生じるので当分の内税金を払わずに内部留保はすぐできる。先代は会社を譲つた後できるだけ会社に居ないように我慢する。忍耐が大事。口出しもしないようにする。特に創業者は一代で会社を大きくしたのではかゆくて見ていられないで(しょうが)口出しをしないように我慢する。高額な退職金をもらって新しい事業を始めるのもよいと思います。

創業者は会社が存続する限り費えつづけます。本を出版したり、銅像に於て会社に飾りつけもします。それと比べて二代目は、厳しい経済環境の中で存続にあたり、縮小したり、倒産でも(しょうが)ものな、2代目のボンボンが会社を潰した批判されます。2代目のほろがつつむ立場にあります。親より厳しい経済環境で必死になって経営している後継者のつらさを理解し、失敗しても口を出さず失敗も経験させ育てほしいと願っています。先代のほろがはるかに多くの失敗をして今の自分があるのですか。

古田土 満